

資料紹介 2 「菅原八郎右衛門家文書」

はじめに 一資料調査の経緯一

平成 26 年度鯖江市文化財調査委員会において「菅原家文書」の再調査が議題に上がった。これを機に当館では、所蔵者より調査寄託を受け、文書群の内容調査を行った。本稿で紹介するものは、調査寄託を受けたうちの一部であり、その大部分は『福井県史』編纂時の悉皆調査時に作成された目録およびマイクロフィルムと重複している。このことから、当該資料群は、およそ 30 年前の悉皆調査時からほとんど損なわれることなく保管されていたことがわかる。ただし、文書群とは別に保管された商標（105 件・1558 点）の大半の所在はわからなくなっており、現在は 11 件（116 点）のみ残存している。

本資料は段ボール箱（A4×B4 サイズ）に換算して 15 箱、総点数およそ 15000 点を数えると概算できる文書群である。県史編纂時には羽二重売上帳・生糸買入帳・職工履歴書・工場日誌などの簿冊類、織物同業組合などの通知類・各種取引書簡などを中心に約 350 点の簡易目録が取られたが、本調査ではこれらの手書き目録を表計算ソフトを用いてデータ化し、計 1210 点（封筒や紐による一括資料含む）の簡易目録を作成し、「菅原家文書」の実態把握の足がかりとした。

なお、県史編纂時に資料収蔵用に用いられた段ボール箱（以後、「旧箱」）は 18 箱だが、湿気・虫損による劣損が大きく、文書保管箱としてこれ以上使用することは不可能であると判断し、資料の入れ替え作業を行った。この際、現状での上位置にあるものから順に付箋を挿入して調査番号を与え、できるだけ文書群の現状をとどめた。しかし、既に県史編

纂時以前に年代あるいは資料の性質で分類をした形跡があることから、文書群が集積された当初の姿を知ることはできない。

また、本調査で未着手とした文書群の旧箱には、福井県史編纂時のものと考えられるラベルやメモが付されており、次の大まかな分類でひとまとめにされていた。

- ・明治 40～大正 8 年
- ・大正 2～9 年
- ・大正 3～7 年
- ・昭和 2～16 年
- ・明治 41～43 年
- ・大正 2～11 年
- ・大正 12～14 年
- ・書簡

よって、本資料群は大正期を中心に創業時から戦時中までの約 40 年間に記録するものであり、県内の繊維産業が織機から工業化に転じる実相を明らかにする好資料だといえる。

1. 菅原八郎右衛門家

「菅原家文書」を所有する旧今立郡中河村（現在の鯖江市橋立町）の菅原八郎右衛門家が機業場を創業したのは明治 39 年（1906）である。当主は農閑期に鎌の行商を行っていたが、後に羽二重機業家に転じ、大正 3 年（1914）には工場を増築して発動機による本格的な動力化を遂げた。そもそも、現在の鯖江市域をふくむ旧今立郡の神明・鯖江・中河・新横江・南中山・舟津・粟田部の 7ヶ町村は郡内の主要機業地であったが、賃織などを行う小規模な農村副業的機業家が圧倒的に多い地域であった^①。

2. 解題

明治初年、士族授産事業の発展により福井県下では絹織物業が勃興した。明治 20 年代頃には、行政の積極的な勸業政策に加えて新技

表 1 大正 8 年の絹織物工場（中河村）

工場名	工場主	創業年	製品価格	従業者		平均就業時間	原動機	主要製品
				男	女			
後藤織物(合資)	不詳	1919	100,000	3	25	12	電動機	平地羽二重
吉村機業場	吉村 永治郎	1916	40,000	—	10	12	〃	〃
丸九工場	佐々木 九平	1917	42,393	—	9	12	〃	〃
加藤工場	加藤 曾平	〃	28,857	1	6	12	〃	〃
丸サ工場	斎藤 作兵衛	1892	104,000	3	13	12	〃	〃
丸六工場	佐々木六右衛門	不詳	23,680	—	11	12	〃	〃
仕入機業場	仕入 篤	1915	144,000	1	13	12	〃	〃
佐々木機業場	佐々木 甚寿	1900	535,000	4	47	13	〃	〃
山田機業場	山田 仙之助	1905	789,979	21	122	13	〃	朱子
丸栄機業場	斎藤 藤栄	1907	327,022	11	40	12	〃	輸出羽二重
菅原機業場	菅原八郎右衛門	1906	386,900	6	48	14	瓦斯機関	〃

『鯖江市史』通史編下巻(表 195 より抜粋)

術の導入もあり、羽二重製織の技術は農村部にまで広まった。さらに、明治 30～40 年代にかけて京都電灯株式会社や越前電気株式会社が水力発電による送電を始めると、機業場では本格的な力織機の導入が図られていく。中河村の菅原八郎右衛門家をはじめ、現在の鯖江市域に起こった機業場の多くが、この時期に創業していることから、電力供給という産業革命により、明治後期以降には農村部の生活形態、特に織物業に従事する若年女性の生活の有様が大きく変容したことがわかる。その後、手織機から力織機への移行で職工が過多となり、生産抑制が必要となる時期もあったが、大正 4 年下半期からは第 1 次世大戦の影響で商品輸出が急増し、大正 9 年に戦後恐慌に至るまで好景気が続いた。

先述のとおり、菅原八郎右衛門家でもこの好景氣中に経営拡大を遂げており、中河村では山田機業場・佐々木機業場に次ぐ経営規模にまで成長を遂げている。また、鯖江市域全体の機業場の経営規模と比較しても、中規模以上の経営規模であり、職工の勤務形態・羽二重生産量の変動・資金繰りなど、明治から昭和初期までの機業場のモデルケースを「菅原家文書」が表しているといえる。

大正 9 年 1 月、菅原機業場を母体に橋立地区住民を出資者として橋立織物株式会社が創

立すると、銀行との取引・株主総会の通知などの資料が多く見られるようになる。また、機業場あるいは株式会社経営の実態を示す多くの私信、中河村役場や帝国在郷軍人会中河分会からの通知文も散見されることから、当該資料群は、明治後期から昭和前半までの中河地区の歴史を物語る資料としても有用であろう。

おわりに 一活用に向けて一

「菅原家文書」は鯖江の機業勃興の実態を示す稀有な資料群である。資料群には重大な虫損や汚損は少なく、鯖江の近代史解明に大いに有効と考えられるが、資料点数の多さや内容の煩雑さから、簡易目録を取り終えることも困難な状況にある。しかし、こうした状況にあっては、今後、しかるべき調査・研究の機会を得ることなく、資料が散逸する可能性をはらんでおり、今回、文書群のごく一部分ではあるが簡易目録の公開に至った。本稿が、今後の調査・研究を進展させる一助となれば幸いである。

① 『福井県史』資料編 11 近現代 2 (福井県、昭和 60 年)